

みやもとたかし  
宮本俊之先生との対談記録

医学科5年  
えはら だいすけ  
江原 大輔

江原：それでは、第1回メディア部インタビューを行いたいと思います。今日は整形外科の宮本先生にお越しいただいています。宮本先生、今日はよろしくお願いたします。

宮本先生：よろしくお願いたします。

江原：さっそく質問の方にいきたいんですが、整形外科での一日について教えていただけないでしょうか。

宮本先生：そうですね。一日といいましても、一週間で大体スケジュールが決まっています。まあ具体的に言うと外来の日と手術日と分かれてるんですけども、今日なんかは午前中は外来で昼から手術みたいな感じですね。最近は大学病院も救急を積極的に取り入れるようにしていますので、整形外科は特に外傷・怪我（での救急）が非常に多く、昼夜問わず手術部に行くことが多いんです。基本的には月曜日は午前中外来があって、昼から教授の回診があります。そこで修練医の先生なんかはプレゼンテーションをするので、その段階でひとつひとつの疾患を理解してるかどうかのチェックを行っています。火曜日と木曜日は手術日なので、朝から晩までほとんど一日中手術場にいます。

江原：は一…やっぱりお忙しいんですね。

宮本先生：そうですね。水・金もまあ午前中は外来をして、昼からは今日みたいな感じで手術したり、そのときに応じて治療をしているという状況です。

江原：本当に、合間を縫って来てくださってありがとうございます。

宮本先生：いえいえ、とんでもないです（苦笑）

江原：では、次の質問に。先生の教室全体に関する個人的な印象についてお聞かせください。

宮本先生：まあ整形外科といえはですね、ほとんどがスポーツ経験者っていうか——もちろん



(撮影：山本)

んスポーツを経験していない人もいっぱいいるんですけども——わかりやすくいうと「体育会系」ですね。体育会系というともう上からいうことを素直にやみくもに聞くといい感じもすると思うんですけども、そうではなくチーム行動というんですかね…チームで我々治療というものを患者さんにやってるので、もちろん主治医というのはあるんですけども、主治医の周りには指導医がいたりとか、その中間の役のものがいたりだとか、一人の患者さんに対して少なくとも3、4人で治療をする。そういった中でのチーム医療というのがそのままスポーツにつながる、と。まさに体育会系ということですね。上の先生からはやるべきことをやっておかないと厳しく指導を受ける（笑）

江原：まさに体育会系ですね（笑）

宮本先生：ただ、やっぱり上の先生（指導医）も怒るからにはそれなりにきっちり指導をするという義務がありますので、ただ単にいじわるで研修医や修練医に余計な仕事を押し付けたりということはないですね。

江原：上下の連帯感がある、ということですね。

宮本先生：まあチームとして行動しているので、運動部、特に団体競技をやった人たちっていうのは非常に馴染みやすいんじゃないかなあ、と。また、やってない人でも、そういうことはどの世の中に行っても必要なことなので、自然と身につけてもらっているというような現状ですね。

江原：わかりました。ありがとうございます。では次に、先生が思う整形外科に求められる医師像というのはどういったものでしょうか。

宮本先生：我々医師はまあ大きく人間の命に直接関わる医師もいれば、人間の機能——たとえば生活の質だったりだとか、日常の行動が痛みなくできるかということ——に関わる医師もいて、大きく分かれると思うんですけども、我々はあまり人の生死——手術で生きるか死ぬかということですね——に携わるような仕事はしていません。ただし、その人の人生の質を変える、QOLを変えるということに関しては一生懸命やっています。整形外科で結局（患者が）困ってるのはあちこちが痛い、痛いから生活の質が低下する、やりたいこともできない、旅行にも行けない、散歩もできない…そういった人たちを我々は治療しているので、そこが整形外科の一番の魅力——もともと痛がって生活の質が低下していた方達が、元気になって退院していく、また手術した後リハビリをやりながら徐々に回復していった健康的な状態に戻る、といったことが我々の喜びである、と。

江原：外傷だけではなく、その人の内面や生活まで診るということですね。

宮本先生：そうですね。それが一番整形外科的な治療になるんじゃないかと思います。

江原：ありがとうございます。では次に、先生が整形外科を目指されたきっかけを聞かせてください。

宮本先生：私は小学生の頃からずっといろいろな運動はしていたんですけども、かなり負けず嫌いでですね。運動やるとどの競技でも一生懸命やりすぎるという傾向がありまして、かなり怪我をしたりだとか、疲労骨折なんていうスポーツ外傷というものにもう常に学生時代から社会人になってまで——バスケットボールをやったんですけども、骨折して手術したりだとか、そういうことがありまし

て、自然とですね。整形外科に、特にスポーツ整形ということに関して非常に興味をもって、それを目指してですね。自然な形でというか。

江原：もともと身近にあったと。

宮本先生：そうですね。もともと身近にあって非常にお世話になってたということで、何の抵抗もなく入っていきました。

江原：ありがとうございます。それでは——これメイン（の質問）かもしれないんですが——長大ならではの点、長大の整形外科ならではの点というものは何でしょうか。

宮本先生：そうですね…長崎大学の整形外科ならではの点かどうかはわからないんですけども。我々は、特にスポーツのチームは米倉先生（長崎大学整形外科医局長）以下多くのスタッフで頑張ってるんですけども、単に怪我した人を病院で診て、治療をして外に出してるというだけじゃなく——私はバスケットボール協会に属していますし、サッカー協会に属している先生もいますし、そういった形で治療しながら、なおかつ現場にも行って治療した選手がどのようなプレーをしてるかを見ていくということを生懸命やっています。ですから、長崎市内の高校生——とくにバスケットしてる子なんかは怪我すると大体、大学病院に来てくれるんで、そういった子達が治療した「後」の状態をですね。ただ診察室でレントゲンとったり診察して「治ったよ」と言ってあげるだけじゃなくて、会場に行ってプレーしてる姿を見てあげて「よかったね」「調子どう？」というふうに聞けるのは、スポーツ医の醍醐味というかなですね。それがわたしの一番の喜びにもなりますし、それを積極的に長崎大学はやっている、と。まあ他所でももちろんやってるところはあるんですけども、なかなか大きい都市だとひとつの大学ではどうしても手一杯ということになるので、長崎県内中のそういった選手をいろいろ——まあ会場に行ってもできるだけ怪我人とは会いたくないんですけども（笑）、どうしても怪我というのはスポーツやってるとつき物ですので、そういった選手達が復帰してる姿を見れる、と。ほとんど（プレーしてる選手を）知ってたりとか。あとそこでお世話になってる理学療法士の先生だとか、トレーナーの先生と会って情報交換

が病院以外でもできるというのは我々の強みじゃないかな、と思いますね。

江原：現場と直接関わっていくというのは、かなり興味深いところですね。——では次に、学生時代に先生がしておきたかったことというのは…？（笑）

宮本先生：（苦笑）医者になるとですね。経済的にはそれなりにゆとりが出てきます。学生のとくと違ってお金がないから何もできないという状況はないですけども、逆にですね。時間がないんですよ。

江原：あー…もうずっと働いてる感じですよ。

宮本先生：そうですね。なかなかゆっくり時間がとれないということで…学生時代には逆で、時間はあるんだけどお金はない、ということなんですけども、学生時代にやっとなにかよかったなあと思うのは、もうちょっと自分を高めるような知識を身につけてけばよかったなあ。

江原：ちょっと耳の痛い話なんですけれども（笑）

宮本先生：（笑）もうちょっと本を…今になって、忙しい時こそ本を読みたくなるんですけども、学生のうちにもうちょっと本を読んでおけばよかったかなあ、といつも思ってます。

江原：僕もちょっと、時間はたくさんあるんですけど——お金がなくて困ったりもしてますけども（笑）——やっぱり時間は大切に使っていきたいですよ。

では、最後に学生に向けてのメッセージをお願いします。

宮本先生：今の時代いろいろ情報が氾濫していると思いますけども、その中で情報をいかにうまく使いこなすかというのを、今後みなさんが社会人として——医師である前に社会人でなければなりません。そういう常識を身につけるといことも大事なんですけども——自分の将来的な可能性を広げるために、私は大きく二つのことができると思っています。ひとつはコンピュータがうまく扱えるか、インターネットを扱えるかということですね。メールのやり取りだとか、情報をインター

ネット引き出すとかですね。

江原：デジタル化の時代ですからね。

宮本先生：そうですね。ですから、パソコンの技術をぜひ、ですね。

ほとんどすべての病院が電子カルテ化しているんで、ブラインドタッチでワープロは打てる程度になっておかないと、患者さんを診察するときにどうしてもコンピュータとだけ向き合ってしまうので、患者さんから「お医者さんはずっと私に背中を向けてた」というような話を聞くんですよ。

江原：それは印象よくないですね。

宮本先生：ですから、ひとつはコンピュータに強くなっていくということですね。これはもう必須条件のひとつではないかな、と。もうひとつは、世界を広げるという意味で英会話ですね。英語力というのは、身につければ非常に世界が広がってきます。世の文献はほとんど英語の文献なので、そういった労力を考えてもですね。あと、海外へ留学へいったり研修にいったりだとかそういう場合に英会話に自信があるかないか、ですね。

江原：（自信がないと）抵抗がありますもんね。

宮本先生：そうですね。ただ、我々大体中高6年間、大学まで入れると8年間英語学んでるわけですよ。単語数からいうと、3歳ぐらいの子供がしゃべれる単語数はとりあえず知ってるわけで、その気になれば意思疎通というのはできるんですよ。そのガッツがないだけで。英語力を高めるというよりもそういった失敗を恐れないとか、ガッツを身につけてですね。外国人相手だろうが、誰が相手だろうが平気で英語でしゃべれるような心意気を学生のときにつくっていただければ、と。そうすれば間違いなく医師になって世界は広がってきます。がんばってください。

江原：はい。ありがとうございます。

——では、これで第1回メディア部インタビューを終わりたいと思います。宮本先生、今日は本当にお忙しい中ありがとうございます。

（取材協力：長崎大学病院医師育成キャリア支援室）